

ダンスに「SO...」 (異文化言い分EVEN)

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	183
ページ	63-63
発行年	2010-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00046292

タンスに「SO…」

寺本 実

二〇〇九年二月、ベトナム北部の红河デルタ地域に位置するハナム省K県の中心地Qで障害者の生計調査を行った。Qは都市化が進んだ地域と農村部の両方を含む変化途上の地である。

調査の許可が得られる具体的な土地は行ってみて初めて判明することが多い。この時もそうだった。調査地が未確定だから調査中の宿先事項のひとつとして当地の人民委員会(役場)から紹介をいただいた上で直接訪問し、交渉を経て宿所が決まる。

しかし、この時は少し勝手が違った。その町の人民委員会と同じ通り沿いに立つ瀟洒な県の人民委員会の建物内に宿泊用の部屋があるというのだ。早速行ってみるようになった。大きなトラックを抱えて、えっちらえっちらと三階にあるその部屋まで運び上げる。ドアは二重扉となっていた。鍵をもたせて中に入ると、説明通り誰も使っていない部屋だど一目で分かった。部屋の奥の上部に小さなクローラーが据えてある。小さい机とイス、ごみ箱、モップもあることを確認する。テレビなど電気機器は置いていない。三つある寝台の間を抜けてトイレとシャワー室の様子を見に行く。天井を見上げると一面に深緑の敷き詰めモノがもこもここと広がっている。カビなのだろうか。洗濯用の盥はあった。

部屋に戻り、昨年、ベトナムの中部北方地域のタインホア省で調査をした時のことをふと思い出した。宿所の部屋の壁に拳大の穴が空いていて、蚊や虫が「もしよろしければ」の状態だった。蚊遣も数力所破れていた。洗面所で洗濯をすませ、その日書き込んだ調査票をチェックし、日記を書いて

眠ろうとした後も、小さく薄暗い蛍光灯の光の下、蚊との戦いが続いた。クーラーはなく、扇風機を旋回させて「涼」と「蚊退治」の二兎を追ったよな…。ここは窓を開けることはできないが適度な隙間がある。気密性だつて一定程度保たれている。階下の門には守衛さんが常時いてセキュリティも申し分ない。そう思ったところで部屋の見聞を終えた。翌日から早速調査を開始した。日課は大体次の通りとなった。六時半に出発。朝食は宿所そばの店でフォー(米を原料とした麺による汁そば)を食すか、路上の店でソイ(おこわ)、バインミー(フランスパンに縦に切り込みを入れて、胡瓜、パクチーのような生野菜、ハム、玉子の焼いたものなど、具を挟んだもの)などをもとめて守衛さんの部屋で食べる。朝食後、Qの人民委員会へ行く。担当職員のBさんと待ち合わせ、時間が来ると、彼の道案内、仲介の下、調査対象のご家庭を午前と午後に分けて訪問し、話をうかがう。時に訪問先のご家庭で、心尽くしの昼食を御馳走になることも。仕事を終えて夕方宿所に戻り、近くの店でヤシのジュースを一杯。飲み終えると白いヤシの果肉をスプーンですくって食し、なるべく頭をか

らっぽにしてから部屋に戻る。汗をふき、しばらくすると夕食に出る。常連となった橋を渡つてすぐのところにある未だ建設中の平民食堂へ。幼い子供が三人いる若夫婦が経営していて、チャオガー(鶏肉入りお粥)が定番となった。

部屋に戻ると洗濯、書き込んだ調査票の見直し、メモの整理を行い、日記を記す。そして翌日の準備。作業を終えると夜一〇時を回る。

こうした日々の日課が定まった頃、部屋の奥に据えられたタンスの鏡に何か刻まれていることに気が付いた。何だろうか? アルファベットで「エス」「オー」「エヌ」「ワイ」とある。「SONY?」。

「え、このタンスSONY製?」。少し考える。いくらSONYでもタンスまでは作ってないはずだ。ひよっとしたら同じ名前の家具屋さんが近くにあるのかもしれない。だがそれもなかなか考えづらい。タンスを作った人はその名を刻むことでタンスの信用価値を上げようと考えたのかもしれない。

地方に出て一般のベトナムの方に「知っている日本人の名前を挙げて下さい」とお願いすると、よく返ってくるのが「おしん」という返事。その後は日本の会社名をいくつか列挙して答とする人が多い。そうした方の多くは日本製品の品質の高さを繰り返しほめて下さる。

日本人がその場になくても、日本のモノがベトナムの人たちの生活の傍らにあり、ベトナムと日本とを自然に結びつけているという現実がそこにはある。日本製品に対する信頼が日本に対するイメージと結びつき、日本とベトナム、ベトナムと日本の交流の支えをしている。

一九九四年一月、一七世紀後半の伊万里焼の皿や椀が、有名な観光地となっているベトナム中部のホイアンで発見された。ひとつの例にすぎないがそのつながりは歴史的なものでもある。

タンスの鏡に浮かび上がる「SO…」の文字をきつかけに、日越、越日交流の一端を改めて想起するとともに、日本人がこの国で、この地で仕事をし、いく意味を考えさせられた。



寺本実 / アジア経済研究所東南アジアII研究グループ

専門は、ベトナム地域研究。近著に「ベトナムの障害者の生計—外部環境とのかかわりについての事例調査を通じた考察—」(森壯也編『途上国障害者の貧困削減—かれらはどう生計を営んでいるのか—』岩波書店、2010)など。